紹介

平沢竜介著『古今歌風の成立』

佐藤信一

平沢竜介先生の『古今和歌集』と『土佐日記』に関する論考を纏めた著作である。第一部「古今歌風の成立」、第二部「土佐日記論」、第三部「古今集の構造 四季の部の構造」からなる。

第一部「古今歌風の成立」第一章「古今歌風の成立」では、『万葉集』と『古今和歌集』の歌風の違いが問題にされている。相貌を全く異にする二つの歌集の、変化の原因を究明することが、意図されている。従来は、和歌に公的な地位が付与されたことと、漢詩文の表現の受容のみに、論が偏りすぎていた。そこに平沢先生は「作者の精神のあり方」（七頁）の反映を読み取る。『古今集』に特徴的な掛詞、縁語、見立てといった新しい表現技法の発生は、新たな表現世界、のみならず、新たな精神世界の出現をも、告げるものなのである。掛詞や縁語によって、文脈が錯綜し、詩情の非日常性を強く印象付けることになる。また、見立てを用いることで視覚的イメージを伴った非日常的な文学空間を形象することを可能たらしめているのである。『万葉集』に見られる序詞は地名を導くものが大半であり、二種のイメージを重層させる『古今集』のものとは全く異なる。つまり『古今集』では現実の再構成が目指されており、『万葉集』の景物が充実した存在感を有するのと対照的である。また『古今集』に於いてよく見られる歌枕も、観念上の土地として設定されたものであった。『古今集』の、こうした技法による「非日常的文学空間は、〈現実〉との一体感を喪失し詩的空間の形象の困難さに直面した古今集時代の表現主体が、既に表現不可能となった存在感、生命感に満ちた詩的世界の代わりに、そのような表現主体にも形象可能な詩的世界として新たに獲得したものと考えることができる」（三六頁）のである。つまり、万葉の時代には、表現主体と〈現実〉とは、一体感を有していたが、『古今集』になると分化してしまうのである。

ただ、平沢先生は『古今集』に漢詩の影響を、字句の表現などを除いて、認めない立場をとる。それは平沢先生の論が、単なる表現論と一線を画する所以でもある。だが、例えば『古今集』に顕著な秋を悲しむと言った発想自体、中国の六朝に起源をものであって、これは「詠出過程に何らかの変化が生じたこと」に相当するのではないだろうか。

第二章「万葉から古今へ―視覚表現を通して―」では、『万葉集』と『古今集』との視覚のあり方の変化、その根底にある見るものと見られるものとの関係に着目して、二つの集の精神構造の変化が考察されている。そこでは、『古今集』の「ながめ」には、実体的に物を見るよりも、物思いに耽る感があるとと指摘される。その語義の変化、つまり物思いから外界を見る視

線への変化が発生したのは、『拾遺集』以後とのことである。その変化は散文の物語作品にも見て取れる。しかし、この語義の「ながめ」は『万葉集』や上代の文学作品には存在しなかった。この変化は、王朝時代以降の閉塞的な生活を強いられた貴族の女性の意識の反映として、理解される向きが多かった。ただ平沢先生は、その用例の使用者が男女両方であることから、「平安時代における『ながめ』の大量の発生は、もっと時代全般、あるいは貴族社会全般にわたる人々の視覚のあり方の変化によると考えるべきではないだろうか」（七五頁）とする。そのような変化をもたらしたものとして、「精神構造の変化」を挙げるが、卓見であろう。平沢先生は、「みれどあかぬ」や「見ゆ」といった、万葉時代に特徴的に用いられながら、古今集時代には衰微して行く言葉に、見るものと見られるものとの関係の変化が介在することを明らかにした。このことは、当時の人々に、「われ」の存在が前よりまして意識されるようになったことを証し立てているのである。

第三章「古今集の言語意識」では、仮名序と真名序とを手掛かりに、古今集歌人の「心と言葉は別々のもの、つまり両者は密接に連続したものではなく、その間には大きな断絶があるという認識」（一〇四頁）を炙り出す。見立てや掛詞といった技法の検討を通じて、言葉と物の乖離が強く意識され、前代と異なった新たな言語観が存する必要があったと説かれる。また、万葉で叙景歌が存在するのに、古今ではほとんど見出せないという問題で、「現実を具象的に把握する力がよわくなったことによるもの」とする。だが、それも、先に指摘された「新たな言語観」と、いわば差し替えにして獲得されたものではなかったか。

第四章「古今集における想像力―桜の歌群の分析を通して―」では、『古今和歌集』巻一、二所載の桜の歌群を、冒頭から一首一首検討することで、古今作者達の「眼前の対象には没入しきれず、未来に対する懸念が絶えず現在を浸食するといった精神のあり様」（一三二頁）を、「現実に目の前に存在する事物の美しさより、消滅せんとする美、あるいは眼前に存在しない想像上の美により美しさを感じるという感性が育ってきていることを意味する」（一三五頁）と、指摘する。その上でイメージが具体的な物を媒介にしていた『万葉集』等の、前代の文学に対して、『古今集』では、外界の存在物は無用な物であり、むしろその消滅が、想像力を活性化させる契機になっていると結論づける。

次いで、第二部「土佐日記論」第一章「土佐日記試論―貫之の意図―」では、『土佐日記』の書き手の混乱、あるいは分裂が、なぜ起こったのかという問題を、貫之の「意図的な操作の結果」（一四七頁）ではないかという視点の導入から解釈しようとする。貫之の時代は、文章（漢詩文）が国家の運営に役立つ物とする「文章経国」の思想が、漢詩文の高い地位を保証する理論的根拠となっていた時期であり、また一方で私的な文芸、仮名文学の揺籃期でもあった。『土佐日記』は後者に属する。貫之がこのような分裂を偽装することによって、律令官人としては許されていなかった私的な世界の描出を仮名散文で敢行することが、可能となったのであるとする。冒頭部の女性仮託も、

書き手が混乱しているように見せかける偽装であり、そうすることで貫之は表現したかったものを語ることが可能になったとされている。その貫之が表現したかったものとは、亡児への哀悼、同時に庇護者の喪失に対する悲しみであって、従来主題とされてきた歌論的要素は、むしろそれを韜晦する役目を果たしたとする。平安時代の女流文学の隆盛も、貫之が縛られていた、男性官人の文芸観の制約から、女性が自由な立場であったことによるとしている。

第二章「土佐日記における訓読語—貫之の使用意図—」は、『土佐日記』に特徴的な訓読語や訓読特有の語法について、女性仮託の立場に立つ貫之としては、矛盾であるとする。漢詩と和歌の対置、末尾の対照的な構成から、訓読語の使用は不注意によるものではないと言うことができ、仮名和文の未成熟から訓読語を使用したという見解も、貫之が「表現効果」(一九七頁)を求めたからと説明することで解決するとしている。平沢先生は訓読語の使用を、「土佐日記がいい加減に書かれたものと見せかける偽装手段の一つ」と捉えることによって、『土佐日記』の表現に見られる、乱雑に書かれた印象と、奥行きと深みを解釈する。

さらに、第三部「古今集の構造 四季の部の構造」第一章「春の部、「梅」の歌群の構造」、第二章「春の部、「咲く桜」の歌群の構造」、第三章「春の部、「散る桜」の歌群の構造」、第四章「春の部、「花」の歌群の構造」、第五章「夏の部の構造」、第六章「秋の部、「紅葉」の歌群の構造」、第七章「秋の部、「菊」の歌群の構造」と続く。何れも従来の研究史では、一首一首を取り上げて論じるのに終始しているのに対して、歌群として捉えようとする論考である。ここでは第七章を中心に検討してみたい。

そこでは、外来の景物である「菊」が詠まれたのは、比較的新しい歌であることから、『古今集』の特質を炙り出している。「菊を植えつけた時の歌」に始まり、「咲いている菊を詠じた歌群」、「移ろう菊を詠じた歌群」と続く配列基準と、見立ての技法を用いた歌と、永遠性を詠んだ歌が配置される対称構造を明らかにする。「個々の歌の詠作年次やそれぞれの歌の詠まれた場、あるいはそれらの内容や対応関係といった点が考慮されて、全体の配列がなされているのではないか」と、結論づけられている。ただ、中国伝来の景物「菊」を考えるのに当って、漢文表現との関係に全く言及されていないのは、如何かという感を否めない。例えば業平の歌の背景には、夙に契沖が『楚辞』「九弁」の影響を指摘する。敏行の「菊」を「星」に見立てる技法も『藝文類聚』「菊」所収の盧諶「菊花賦」「翠葉雲布、黄蕊星羅」に淵源を持つことは言うまでもない。そうした要素を織り込むことで、新たな対称構造が見えてくるのではなかろうか。

また瑕瑾をあげつらうことになるが、一四五頁、引用文の四行目、「かぜなみのあやふれば」は「あやふければ」の誤。一九二頁一二行目、「みましたかば」の「た」は衍字。二四〇頁一行目「この歌群は90から118までの…」の「118」は「103」の誤りではないか。また、第三部の第五章までは歌番号で論じているのでわかりやすいが、第六章、第七章で「二首目」「三首目」

とされているので非常にわかりにくかった。歌番号で統一してほしい。

以上、瑣末な点にこだわりながら、通覧した。とは言え『古今集』の達成した非日常的な文学空間や、奈良から平安への過程で生じた視覚の有り様の変化であるとか、『土佐日記』における、戯れに書かれた振り、訓読語の多用による偽装、また、『古今集』の歌群の配列から、看取されるその構造と、貫之にまつわる作品群の解析が志向されていよう。その解析を通じて、古今的表現をめぐる新たな文学史の構築が目指されているのではなかろうか。そのような印象を持った。

（平成一一年一月一一日刊　A5判　二九三ページ　七五〇〇円　笠間書院）